わたしの見た「ちびくろ救援ぐるうぷ」

南野容子・大阪

イラストは「てんと村だより」より

地震からもう５か月がたちました。神戸の街には、点々とさら地が目立っています。ここまで復旧したと見る人もあるでしょうが、元の生活へ戻るにはまだまだだとも見える風景です。

この期間、私は「ちびくろ救援ぐるうぷ」で、だいたい週１回の日帰りのボランティアをさせてもらってきました。このグループの活動は、兵庫区にあるちびくろ保育園を中心に、被災した友人たちが集まり、そこに全国のネットワークから人や物資が集まり、地震後２日目の炊き出しで始まりました。私は以前から保育園の知り合いの１人でした。

ここは、「何かさせて欲しい」と思っている人なら、誰でも受け入れてくれます。ただし、「指示」してくれるのを待っていては、あまり何もできません。３人の事務局員の方がだいたいの仕事を計画し、みんなで分担したら、あとはその都度状況を判断しながら、自分でやっていくしかないのです。

週１回の日帰りでは、１つの仕事を継続的にできないもどかしさがありました。でも、長期間ボランティアでがんばっているちびくろの人たちの応援団の１人として、私なりのペースで、長く続く復興への道のりを見続けていきたいと思いました。

毎週行く度に状況が違い、できる仕事が変わりました。帰り道、手帳に、その日したことを書きとめていると、それも１つの歩みになっていました。私が垣間見た「ちびくろ救援ぐるうぷ」での様子を、日にちを追って少し書いてみたいと思います。

１月30日（月）

ようやく気持ちも落ち着きはじめ、ちびくろに行こうと決心する。ＪＲは芦屋まで動くようになったが、その先どれだけ時間がかかるかわからない。現地がどんな状況で、私の体力がどれだけあるのか、想像もつかない。足手まといにならないように祈るような気持ちだった。

電車で大阪から芦屋まで30分、不通区間の代替バスを待つだけで１時間、それでも立ち席という条件でかなり早く乗れたほうだ。バスと緊急用車両だけが走っているはずの国道は渋滞でほとんど動かず、２時間たって、たまりかねて途中から歩くことにした。

合計４時間半で、ちびくろに到着した（地震前は50分で行けた）。いろんな角度に傾いたビルが多い中、保育園がまっすぐに立っていてうれしかった。たくさんの人が忙しく活発に働いていた。友人の元気な姿も見れて、心からほっとする。

炊き出しは、その日は朝夕２回 200～ 300食くらいだったと思う。まだ食べ物の配給を受けていない小さな避難所が見つかることが時々あり、突然 100食とか 200食とかの追加があるという。

私は雑炊用の細かい野菜をひたすら刻んだ。ふきん用のタオルを洗った。屋外での汚れは普段とは違ったし、氷のような水を何度もくみに行きながら洗うのは大変だった。

洗うのに使った水は全部集めて、トイレ用に残しておいた。紙や、新聞紙に包んだ大便はゴミとして捨てるのだが、うっかり紙を水に落としたり、いつもの習慣で水洗のレバーに手をかけていたりする。その度に「生活の便利さ」を思い出し、こんなもろい仕組みで生きていたのかと改めて思った。

帰りは、バスを待つ行列があまりに長いので、国道を歩いて帰ることにした。途中、倒壊して歩道がふさがれているところがたくさんあり、車道をトラックと一緒に歩いた。救急車がひっきりなしに通った。暗くなってから１ブロック全部が倒壊しているところに出

てきて、「無事に家まで帰れるのだろうか」と背筋が寒くなった。国道を渡りたくても信号が停電で渡れない。マスコミが流している復旧の情報は、車のためのものだとわかった。

４時間歩いて芦屋駅までたどり着き、なんとか無事に家に帰れたが、途中余震もあり、１人で歩くのは無謀だったと反省した。大阪に帰ると、まっすぐ家が立っていて不思議な気がした。

２月７日（火）

交通の復旧状況は同じだったが、バス専用路線ができ、片道３時間で行けた。この日は、下着や薬などをリュックに詰めて、自転車で20～30分のところにある避難所を２か所、調査に回った。

ちびくろは、兵庫区、長田区をエリアに、小さい規模の避難所を中心に１つ１つ回って必要なことを聞き、救援活動を行っていた。調査用紙にあるようなことを聞いてくるのだが、すでにいろんな組織のボランティアがたくさん入っていて、しょっちゅう同じようなことを聞いていたので、「被災された方に失礼にならないようにして欲しい」と言われて出発した。私の行ったところでは、みなさん快く話をして下さって、ほっとした。

30人ほどもおられただろうか、小さい老人福祉会館のホールで、それぞれ布団１枚分のスペースを段ボール１～２個で仕切って、毛布をひざにかけ、ぼんやりと座っておられた。１人分がとても狭く、数枚毛布を重ねただけの敷物の薄さが感じられ、テレビで映しているのは偽物だと思った。

昼間おられるのはお年寄りがほとんどだった。避難所に届いているティッシュ１箱でも、他の人に遠慮して取りに行くことができないおばあちゃんがおられた。初めて訪れた私に、生活保護のお金を取りに行けないので取ってきてくれと頼むおばあちゃんもおられた。その件は次の日までかかったが、区に連絡して、担当の福祉課の人が行ってくれることになった。市も区も、１人１人に手が回らない様子で、私の電話に喜んでくれた。何だかとても良いことをしたような気持ちになった。

その避難所では、生活に必要な物資はそろいはじめていた。お風呂に入りたいという声があった。避難所全体でではなく、個々人が援助を求めておられるんだなあと思った。

結果はちびくろに報告し、それに対してちびくろは自分たちでできることは自分たちで対策を取り、その他はＮＧＯボランティア連絡会と協議したり、関係機関に連絡していた。

２月14日（火）

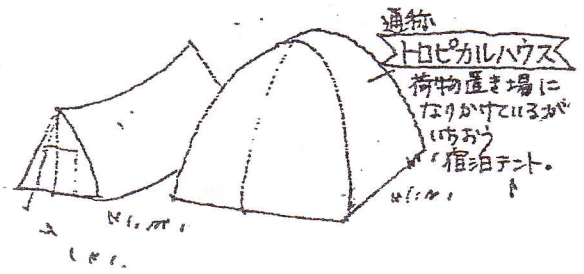
連れ合いと２人で参加した。ＪＲが住吉まで開通し、片道２時間半くらいで行けるようになった。

前の週、ちびくろの人たちはまだ魚が食べられないと言っていたので、ブリの照り焼きを持っていったら、この日の炊き出しは鯖の煮物だった。明石から届いたそうだ。１週間で状況がぐっと良くなる。毎日のように参加できない自分が恨めしかった。

保育園は手狭になったため、近くの公園にテントを張り、拠点を移すことになっていた。公園のテントで物資の仕分けをし、近所の被災者の人たちに配った。

送られてきた物資の箱には色々なものがあった。小さい子のいる人だろうか、子ども用の下着を各サイズ数枚ずつ買いそろえて入れてあった。なければ困るだろうと色々なものを少しずつていねいに包んで入れてあるものもあった。気持ちは痛いほどわかって、温かく受けとれるのだが、災害の大きさと、今切実に物を待っておられる人たちの数を考えると、送り手の思いほどには役に立てられない。つらかった。個人の善意を役立てるには限界がある。

シミのついた服や、着れそうもないドレス、使い古した靴下や下着の入った箱も結構あった。慣れてくると、入れ方を見ただけで下の方が想像つくようになった。援助を不用品を処分する絶好のチャンスだと考えているのかと思うと、とても悲しかった。



ちびくろには、全国からのボランティアがたくさん増えていた。他の組織で、ボランティアを断っているところも多いと聞いた。

2月20日（月）

ＪＲ灘～三ノ宮間が開通した。ＪＲで住吉まで乗り、15分歩いて開通したばかりの阪急御影～王子間を乗る。そこから５分歩いて、再びＪＲ灘からＪＲ兵庫へと電車に乗り、代替バスに乗らずに行けるようになった。２時間で着き、バスのことを思えば、ずっと楽になったが、それでも厳しい。

駅の仮設のホームに、満員電車からすごい群衆が吐き出される。１台の電車にこんなにもたくさんの人が乗っているなんて、今回のことで初めて知った。こんな非常事態の中で勤勉に通勤するのが日本人なんだなあと思った。

炊き出しの係をした。救援物資の中からメニューを決める。ネットワークの関係で、立派な有機野菜がたくさん集まるのだが、種類がまんべんなく届くわけではない。腐らないように考えて使っていく。

避難所用が３～４か所合計で 150人ほどと、ボランティアの食事用に40人分。白菜と豆腐のお吸い物や何種類もの野菜の入った味噌汁。菓子パンと冷たいおにぎりの配給しかない避難所の食事には、温かいものが必要だ。頭の中で順番を組み立て、要領よくしないと、プロパンで 200人用のお湯は簡単には沸かない。いつもの家事労働がこんな時に威力を発揮した。自分も役に立っているんだなあと思えてうれしかった。

2月28日（火）

食品倉庫テントにたまっていた缶詰類を整理することになった。かなり早い時期から来ていた救援物資の中に、随分日付の古いものがあった。中には、20年前の日付が付いているものもあった。

オートミール、コンビーフ、鯖の煮物、ピラフ、赤飯・・・。誰が、どういうつもりで送ったのか、聞いても誰も知らなかった。実際に食べてみると、どうもないものも多かったから、良心的に解釈すると、「古くても食べられるのだから、有効に使おう」ということだろうか。売り物としては使えないことだけは確かだ。

サビのひどいものは除き、大丈夫そうなものは、説明をしてから配った。調理して、ボランティア用のご飯にも随分なったのだと思う。ボランティア同士でも話し合ったが、コンビーフだけは危険だということで、捨てることにした。そのままでは捨てられないので、１つ１つ開けて缶と中身を別々にし、中身にはＥＭ菌を混ぜて堆肥化し、ネットワークの有機農家に引き取ってもらっていた。

炊き出しで大量に出る生ゴミは、活動中ずっとそういう風に処理していた。下水道も寸断されていたから、川や海を汚さないように石鹸を使うように工夫していた。水道のない時の水、ガスのない時の火の問題もそうなのだが、私にとって頭だけで理解していた問題を体得する良い機会になった。全国からちびくろに来た 400人のボランティアたちにも、きっと響くところがあったはずだ。

ゴミの山が、まだ町のあちこちにたまっていた。

3月6日（月）

前の週に持って帰った製造年月日のわからないオートミールで、カップケーキを 200個作っていった。数人のボランティアで、隣の明親小学校と須佐野中学校の避難所で配った。数百人の大きな避難所だが、昼間はお年寄りや病気の人が１教室に１人か２人残っておられるだけになっていた。

もう、小中学校は少しずつ始まっていた。避難所に配られる食事の数が、避難所内に住んでいる人の分だけに制限され、「よそから取りに来ないで下さい」と看板が出ていた。傾いた家や車で生活している人たちはどうなるんだろうと思った。

午後は、車でテント村を回った。九州から来た按摩のおばさんや、被災した小さい子どもたち２人をお守りしたボランティアも途中まで一緒だった。30ほどのテントが公園に張られ、共同生活をしているところだった。角材にブルーシートを張っただけのテントで、雨が降ったら大変そうだった。

仮設や借家を探して出ていく人が少しずつ増えてきていて、空のテントが放置されていた。暖かくなって用のなくなった使い捨てカイロが何箱も、山と積んであった。最後に粗大ゴミの山とならないように注意がいると思った。

３月13日（月）

炊き出し係をした。少し要領がわかってきた。段ボール１箱分の水菜と、花の咲きかけたブロッコリーを使い切らなければならなかった。70人分の炊き出しと40人分の食事のメニュー：じゃがいもとわかめの味噌汁、チンゲンサイの甘酢あんかけ、ちらしずし（シーチキン・ブロッコリー・いりたまご）、ブロッコリーのフリッター、水菜のお浸し、豚肉のフリッター。使い切れて嬉しかったから、メモに書いておいた。

３月20日（月）

ちびくろで、東京の地下鉄サリン事件を聞いた。東京から来た人たちが青い顔をして、ラジオにかじりついていた。何が起こったのかわからない第１報に、地震の時の報道を思い出した。大阪でも警戒を強化しているという情報に、家族の事を思った。地震の後も繰り返し思ったことだが、その日その瞬間が大切なんだと教えてくれているような気がした。

午後は、救援物資の配布の店開きをした。ポカポカといい陽気になり、早く冬物衣料整理をしなければならなくなったからだ。

野菜、缶詰、お菓子、ラーメン、古着、靴、小物など、多くの人が気持ちよくもらっていって下さった。鍋などの炊事用品も物資として配っていたが、青い野菜などを持って帰って作ろうと思う方も増えてきたように思う。

地震直後、使い道のなかったハイヒールやスーツも、この日は入学式用にと人気が出た。あげる人と使う人があって初めて助け合いになるんだと思った。

夕方、長期で泊まっているボランティアのお姉ちゃんに、高校生の男の子が話しているのが聞こえた。「今日、学校から家に留年の通知が来てるかもしれない。留年なら、もう学校は続けたくないしなあ。ずっとここに居たいなあ。ここにはすることがあるもん」。

ここでは、実際に働くことで人の役に立つことができる。少なくとも、そんな気持ちにさせてくれる。自分が生きていていいんだという実感が得られやすいのだと思う。私自身もここで働いてみて、自分に対する自信が確実に増えた。

３月27日（月）

小学６年生の娘が一緒に行った。この日の仕事は、配送車に長く積みっぱなしなっていて干からびたじゃがいも１箱と、ほうれんそう１箱を手当てすることから始まった。

一緒に働いた神戸の女性が話してくれた。「この近くにある私の家は中がぐちゃぐちゃになって、片づける気もおこらへん。私はここで手伝って、気分をまぎらしてるのかもしれへん。そやけど、ここで元気に働いていたボランティアの子がまた戻ってくるのが気にかかる。ちびくろには自分の居場所があったけど、地元に帰ったら居場所がなかった、なんて言うて帰ってくる。けど、ここはやっぱり仮の場所や。ここで見つけたすばらしい自分を、元の住んでいたところで、自分なりに発揮して欲しい。それでこそ、ここで得たことの本当の意味があるんやで、って話をするねん。私、カウンセラーみたいやろ」。

私への贈り物のようなこのお話、ちゃんと心に刻んでおこうと思った。

この日の晩ご飯のメニュー：ほうれんそうのお浸し、肉だんごの野菜あんかけ、大根と柿のなます、揚げそうめん、かきもち（古くなったおもちで）、小鰯の煮物（私の差し入れ）

4月2日（月）

ＪＲが全通した。どれだけの人がフル回転で働いたことだろう。どれだけの通勤の人たちが助かるだろう。お蔭様で、バスには車酔いする４年生の息子も今回来れた。

春休みの間、学童保育をする子どもテントができ、この日は私がスタッフになって、子どもたちとフェルトのボールを作った。子どもたちはとてもにぎやかに、楽しんで作っていた。息子の玄太も小さい子に教えたりして、はしゃいだ。

公園はテント村や避難所になり、柵の回りには粗大ゴミが山になっている。瓦礫がそこここに散らかっている。どんなところでも、子どもたちの笑い声は心を和ませてくれる。

4月11日（火）

救援グループの活動の中心は、在宅の老人介護、引っ越し手伝いなどに移ってきていた。私も午前中は、老人ケアに行かせてもらった。長田区で、半壊した家に今も１人で住むおばあさんのおうちの訪問だった。持病があるので、避難所では長続きしなかったらしい。

半壊といっても、生易しいものではない。半分は屋根がなく、骨だけになっていて、そこをブルーシートで覆ってある。床のカーペットがじめじめして、体に悪そうだった。

週１回、ちびくろからボランティアが訪問して、様子を見る。愚痴がいっぱい出る。私たちにはどうしてもあげられない重い問題をひたすら聞く。隣家の悪口が出る。隣は被災者のふりをして色々なボランティアをうまく利用しているんだ。

隣家をケアしているファイルを見ても、それらしい様子は見えてこない。聞き置くしかない悲しい話だった。他人であるボランティアには、踏み込めない限界があるのではないかと思った。

午後は、４人で、避難所に足湯マッサージをしに出かけた。この日行った先の方々は、足湯は気乗りがしないようだったので、肩が凝っている人の背中をさすりながら、お話をした。どの人も、話をしたくて仕方がないように見えた。オウムのテレビを横目で見ながら、「世の中の人はもう震災を忘れてしもたんとちゃうかなあ」と寂しげだった。

こんな風に月日が過ぎました。私は５月は、仕事の都合でお休みしました。その間に、たくさんのボランティアグループが仕事を終えて解散したと聞きました。ちびくろも、７月から体制を一新し、老人ケアの問題を中心に続けていく予定だそうです。今はボランティアが十数人に減ってはいますが、相変わらず元気に活動しているようです。

私は６月20日に、仮設住宅の調査に行きました。第１期に募集した西神第１仮設。特に高齢のお年寄りや病弱な方を優先に入居されたところです。４人で200軒ほど回ったのですが、約 1/3あった倉庫代わりの家を除いて、訪れても訪れてもお年寄りの方ばかり。しかも、買い物に行くにも、お店ひとつないところです。「独居老人の孤独な死」が起きるのも、無理はない気がしました。まだまだ目を離せない状況です。

ちびくろの応援団の私も、まだしばらく通って様子を見てみようと思っています。

（７月３日）